

フォスター+パートナーズ パートナー トニー三木さん



「フォスター+パートナーズ展：都市と建築のイノベーション」

「フォスター+パートナーズ」は国際的な建築設計組織。

ロンドン市民に「ガーキン」の愛称で親しまれる《スイス・リ本社ビル》や、東西ドイツ統合の象徴であるドイツ連邦議会新議事堂《ライヒスターク》、2016年竣工予定の《アップル新社屋》など、世界各地で大注目の建築物を手がけています。彼らが一貫して追求しているのは「伝統と未来」「人間と環境」といった普遍的なテーマ。

森美術館で開催中の「フォスター+パートナーズ展」ではその半世紀に及ぶ設計活動を、日本で初めて総合的に紹介しています。今回の見どころをトニー三木さんに伺いました。

「フォスター+パートナーズ展」はとてもユニーク

「フォスター+パートナーズ」はノーマン・フォスターという建築家が1967年に設立しました。

これまで世界45カ国で300以上のプロジェクトを手がけているのですが、今回は、その中からセレクトした約50のプロジェクトを、東京の景色を背景に、模型・映像・パネル等で紹介しています。

彼らが手がけたのは町、空港などの建物はもちろん、家具に至るまで多種多彩です。

だから、ほかの建築の展覧会とちょっと違って、とてもユニーク。建築のあり方や、最先端技術を使った素晴らしい現代建築をみることができ、大変面白く感じられます。

この展覧会では、まるで「人類の進化」のように、建築がどのように発展してきたかが分かるでしょう。

ぜひ一度、足を運んでみてください。

(2016.02.09) (2016.01.25)

フォスター+パートナーズ展：都市と建築のイノベーション
2016年1月1日[金] - 2月14日[日] 森美術館 東京都千代田区有明3-1-2 六本木ヒルズ森タワー52階



展覧会について

この展覧会は3つのセクションで構成されています。

セクション1は、活動初期の作品がメイン。地球を「宇宙船地球号」と呼び、環境問題をいち早く指摘したリチャード・バックミンスター・フラワーとフォスターの共同プロジェクトも展示しています。

セクション2は、各国が抱える課題に対して、最先端のデザインと技術で応えてきたプロジェクトを厳選した展示です。大英博物館の中庭を、1857年に竣工した円形図書閲覧室を遺しつつ、上部をガラスの屋根で覆って外光の降り注ぐアトリウムとして再生した《グレートコート》などを紹介しています。

そして、セクション3では、未来のライフスタイルを発想（紹介）。最先端技術に裏付けされた近未来の都市と建築の姿を提示しています。そこには《月面住宅》のようなプロジェクトも。空想的なプロジェクトが実現に向けて研究されている様子をご覧ください。

開催概要

- 期間：2016年1月1日（金・祝）～2月14日（日）
- 時間：10:00～22:00（最終入館21:30）
- 場所：六本木ヒルズ展望台 東京シティビュー内スカイギャラリー（六本木ヒルズ森タワー 52F）
- 入場料：一般 ¥1,800、高・大学生 ¥1,200、4歳～中学生 ¥600、シニア（65歳以上） ¥1,500
- ▶ フォスター+パートナーズ展：都市と建築のイノベーション



《スイス・リ本社ビル
（30セント・メアリー・アックス）》
1997～2004年 ロンドン
撮影：Nigel Young, Foster+Partners

プロフィール



フォスター+パートナーズのパートナーのひとり。1999年の入社以来、世界最大の全天候型サッカースタジアム、ウェンブリー・ナショナル・スタジアムをはじめとした数多くのプロジェクトに携わり、最近では、ヨット10隻による船団の設計や、FCバルセロナのカンプ・ノウ・スタジアムのチームリーダーも務めた。現在はサウジアラビア王国のハラメイン高速鉄道4駅の設計チーム、ジッダ・メトロの設計チームのリーダーとして統率している。2014年にパートナーに昇進。